

2002年、ニューヨークの美大を卒業したばかりの“私”は、突然事故に遭う。大混乱の日々の中で、再生してゆく姿を見つめた“魂のセルフ・ポートレート”。

第97回
キネマ旬報
ベスト・テン
文化映画部門
5位



UNIVERSITY OF PITTSBURGH
JAPAN DOCUMENTARY FILM AWARD 2022

東京ドキュメンタリー映画祭 2022

ニッポンコネクション
Japanese Film Festival 2023

the PORTO FEMME
INTERNATIONAL FILM FESTIVAL

JAPANNUAL 2023

*I want to
go back my
real life*

Maelstrom

マエルストロム

監督・撮影・編集・ナレーション：山岡 瑞子
撮影：本田 広大・平野 浩一・高橋 朋子 音楽：オシダアヤ
配給・宣伝協力：ムービー・アクト・プロジェクト
2022年 / カラー / HD / 日本 / 79分
<https://maelstromfilm.com/>



この大混乱に
終わりは来るのだ
ろうか？

マエルストロム

こんな体、こんな未来

たくさんの健常者を乗せた大きな船が

自由に行き交うのに

私は未だに手漕ぎのボートで

どこへ向かって良いのかわからずに漂っている

2002年6月のはじめ、NYにある美大を卒業し、あと一年間滞在予定だった留学生が銀行に向かう途中、交通事故に遭う。突然、それまでの日常を失い、それまでの時間が存在しない場に戻った時、何がその人らしさを繋ぎ止めるのか——。当事者になった“私”は、大混乱の中、変わってしまった日常の記録を始める。事故前の自分と繋がり直し、探している場所に辿り着けることを祈りながら——。

館内ギャラリーにて同時開催予定

Artworks from the Documentary film “Maelstrom” by MIZUKO YAMAOKA vol.2
～ドキュメンタリー映画『Maelstrom マエルストロム』の山岡瑞子のアート・ワークス～

山岡瑞子は2002年初夏、美大卒業直後、留学先の米国・ブルックリンで事故に遭い、帰国を余儀なくされた。卒業後はブルックリンに引き続き滞在し、アーティストのアシスタントをしながら自分の作品をブラッシュアップする予定が、生まれて初めての事故が残酷な現実を突きつける。何年にも渡り、出口のない現実の変化と対峙し、デンマーク滞在を機に、事故前の美大の卒業当時の“駆け出し”の立場に戻ることを目標に制作活動を再開する。事故から20年後の2022年、『Maelstrom マエルストロム』と名付けた初長編ドキュメンタリー映画を完成させ、国内外の映画祭で上映された。2023年12月、横浜シネマリンでの初めての劇場公開を実現させ、上映期間中、劇場近所の高架下 Site-A ギャラリーで、事故前から現在までに制作されたアート作品を紹介する個展を開催した。今回、アップリンク吉祥寺のギャリースペース内に、その時展示した作品の一部を展示する。



山岡瑞子 | 略歴

映画作家 / アーティスト。1998年渡米。2002年 Pratt Institute (NY) 卒業直後、事故に遭い帰国。中途障害者・帰国者の立場からの制作方法を模索する。2016年、パルセロナで初短編ドキュメンタリー制作。BankART AIR 2021 への参加を経て、22年初長編ドキュメンタリー映画『Maelstrom マエルストロム』完成。ピッツバーグ大学 Japan Documentary Film Award 2022 受賞。第23回ニッポン・コネクション他、オーストリア・ウィーンで開催された Japannual 2023 など、国内外の映画祭で上映され、23年12月に横浜で先行上映。第97回キネマ旬報文化映画ベスト・テン第5位選出。2023年度 ACY アーティスト・フェロー。



UPLINK 吉祥寺

吉祥寺 PARCO B2F
0422-66-5042 joji.uplink.co.jp

2024
5/10 (金) より公開

All Screenings with English subtitles (英語字幕付き上映)

@Mizzy Films
<https://maelstromfilm.com>

大きな渦にのみこまれた表現者が最も個人的なテーマに挑み、もがき苦しみがら撒りあげた唯一無二の映画。自分とは、人間とは、人生とは。ひたすら真摯に考え続ける表現者は、街に出て、人に会う。その姿に圧倒され、自分だったらどう生きるかと考えずにはいられない。

映画監督 早川千絵

映像が網膜に差し込んでくる、混乱と不安の中にある希望と未来。

山岡監督本人によるナレーションの、やわらかな声心地よく、レム睡眠の夢のように記憶の中に溶け込んでくる。アートの可能性と彼女の生き様で綴った超現実。

美術家 三枝聡

女であること、車椅子使用者であることの奥に、存在することの痛みが一人称で語られる。

見る側は、語られていない部分の重さを共有し、もう一人の自分を見出す。自分はどうのように成り立っているのか、自分自身であることをまっすぐに続けるのはどうして困難なのか、世界と自分はどうして違和なのか、問い続けることの勇気がそこにある。

脚本人 ヤリタミサコ

「私」にしか見えていない世界を

「誰か」の世界にフィードバックすること。

それが表現の持つ特別な力だと思っています。

「Maestro」は、まさに山岡監督の見えた景色、答えない葛藤と向き合うその時間を丹念に捉え、私たちへと開放してくれました。ドキュメンタリーにしか作りえない一瞬一瞬に目が離せませんでした。完成、おめでとうございませう。

映画監督 深田晃司

生きることは何かを表現すること、表現するためには生きること。山岡監督自身に起こったマエルストロム大混乱を、自らが撮った映像とモノログで綴った本作を見て、そんなことを思った。傑作。

映画監督 本田孝義

「Maestro」が観る者を圧倒するのは、監督の山岡瑞子が、自分にとって痛切極まりない、身を切られるような問題を真摯に描いているからにはかならない。

ただし山岡の場合、作家として何かテーマを探している、そういう痛切な題材に巡り合ったというわけではない。それは突然、自身の身に降りかかった。脊髄損傷という大怪我をするという事故が。

そして山岡は、事故からかなりの年月が経ってから、自分が生きてきた激烈な時間、Maestro(大渦巻き)を作品に昇華させることを選んだ。

いや、選んだというよりは、そうせざるをえない、強い内的衝動に駆られたのであろう。

その内容は徹底的に個人的、パーソナルである。しかしパーソナルな井戸をひたすら深く掘っていくと、しばしば普遍の水脈にたどり着くものだ。

「Maestro」では、それが起きている。

映画作家 想田和弘

本作の完成までどれだけの渦に巻き込まれ、混乱にさらされたことだろう。

淡々と語られるモノログに挟み込まれた肉声が、それを物語る。そのどちらも、山岡監督が向かい合ってきた／いるリアルに他なない。混乱と絶望にあっても、氏は一度たりと未来への希求を止めない。

「脚が癒がせなくなっただけのことで、なにもかもできなくなっただけのわががが」

そのシンプルな一念が、人と社会とのつながりを、自分自身と表現者であることを、氏に取り戻させる。

氏が手放したもの、手放したことで氏が見いだしたものの。大渦のあいまにたゆたう水面の煌めきと、選び抜かれたモノログの言葉を胸に、

わたしはわたしのリストアトに向かう。何度も、何度でも、

立命館大学教授・生存学研究所副所長 大谷いづみ

今自分が当たり前だと思っている現実を、やがては消えてしまうかも知れない。そんな世界に誰もが生きている。

本作は山岡監督個人の物語だが、そんな普遍的な広がりをもち得ている。

映画監督 諏訪敦彦

過去の自分に再接続された山岡さんは言うけれど、再び繋がるまでの時間の中で、幾度も始まりと終わりを超えて、彼女が取り結ぶ人々との関係性は大きく組み替えられていき、自立して生きるということは、誰の手も借りず一人で立つことを意味するのではなく、誰かとのつながりを結び続けることなのではないでしょうか。

研究者／養育星観 齋藤梨津子

人はここまで自分と向き合えるものだろうか。

膨大な内省の記録であり、問いかけと逡巡と諦観と希望が込められた、人生を振り返る旅。

プライベートな日記が他者の心を動かす域に昇華されている様に、ただただ圧倒された。

前東京国際映画祭ディレクター 矢田部吉彦

「Maestro」は、大混乱という意味。「中途障害者」となった監督自身の体感の連続は、渦のように観客を引きずり込む。命懸けの本作は「感動作」として消費されることを拒絶する。命が再び輝きはじめるまでの自問自答は、芸術へと昇華した。美しいと思った。

映画監督 土屋トカチ

ポジティブでいるようにと言われても、人は立ち直れない。映画「マエルストロム」の希望は、制御不能になった自分との親密な対話を続けることにある。

喪失感、後悔、哀しみ、迷いといった難しい感情と向き合い、自分の未来と社会を少しずつ変化させていく。

美術家 藤井光

「こんなはずじゃなかったのに——」声にならない叫び、回し続けたカメラに映るむきだしの世界に、何度も胸が痛かった。ままならない人生、激動の渦、それでも自分を受け止めてくれた波止場があったことに気づいたとき、監督は自ら船をつくりはじめた。失われたものを拾いあつめ、ふたたび未来へと運ぶために。人がひとり生きることを許さず、静かなモノログに耳を傾け、いつの間にかわたしもその船の上、どこまでもまっすぐな「わたし」の記憶に揺さぶられっぱなしでした。

文筆・翻訳家 きくちゆみこ

人生にはIFはない。彼女が不運にも事故に遭ってしまったことには、なんの必然も美談もなく、その厳しすぎる現実を前に、彼女は決して納得もせず、何度も後悔しながら、自己と記憶にメスを入れ続ける。

そこに炙り出されるのは、山岡さんが自らを顧みること、浮かび上がる家族であり、日本社会であり、時代でもあった。彼女と完全に同世代の私は、彼女の繊細な強靭さに圧倒された。フランクフルトの暑く息苦しい映画館で上映が終わった後、わたしはしばしば立ち上がることでできないほどの衝撃を受けていた。

人生にIFはない。そのことを受け入れるのではなく、そのことと共にただ生きねばならないことを、生きていく人になんかできない凄まじい表現がそこにあった。

アートプロデューサー 相馬千秋

見る前は少し心配していた。あまりに伝えたいことが多く、その重量も熱量も半端じゃないから。でも杞憂だった。拍子抜けするくらいに素直に、淡々と語られていた。これなら安心して薦められる。今度はずっと暴れてもいい。

美術ジャーナリスト／画家 村田真

「娘」という役割からの解放と、夢を求めて漕いだ舟が、再び元の場所へとたどり着いてしまった、誰も予期しない現実。嵐の渦から抜け出すために山岡さんが行つたのは、ひたすらに「私」を見つめ、映画という媒体で自分をひらいていくことだった。パーソナルだったものは、社会へ、そして観客の記憶へと接続していく。私は山岡さんの漕ぐ舟に揺られながら、自分の人生や、母との関係をふりかえって、涙が出た。そして、「自立とはなんだろう」と、自分自身に問いかけた。

アーティスト 坂本夏海

本作は、車椅子生活を送りながら自立を決意した女性の可能性を、美しくカラーージュした実話映画。

自由が制限されがちな日本社会で、壊滅的な喪失感を乗り越え、創造を通して自己価値を再発見する、人間味あふれる物語である。

フィルムキュレーター キヤレン・セバンス

ニューヨークで事故に遭い障害を負った女性が、大混乱の渦中で悶え、足掻き、懊悩の果てにたどり着いたのは、己の全てをさらけ出す映画を作ることだった。

絶望の果てからの生還を記録した本作は、表現を志す多くの者を静かに鼓舞するだろう。

「THE ROOTS」黒かたちの歌」監督 高橋慎一

「さっき歌ってた曲を私の映画に使わせて下さい」とライブの後で声をかけていただいたのが山岡さんとの出会いでした。当時私は出産を機にバンド活動を休止し育児に専念するも、やっぱり音楽がやりたくて一人でライブを始めた頃で、びっくりしたけど嬉しかったのを覚えています。

如何なる状況下でも表現し続けようとする彼女の意志に胸が熱くなりました。「軸を自分自身と表現することに戻していかないと、ゆっくりと私が死んでゆくだろう。」と山岡さんが語るところで、毎回私は大きく頷きながら涙ぐみます。感銘と共鳴が波のように押し寄せ、気づくと自分も大渦に巻き込まれているような凄い映画だなと思います。

ミュージシャン オシダアヤ

生きるということは、常に混乱することだ。

山岡さんの人生を追体験しながら、自分の人生を振り返り、そのことを改めて突きつけられた。矛盾を抱え、不自由と自由の狭間で我々は生きている。

山岡さんと初めてお会いした時、私の作品と私に対しての怒りをストレートに伝えてくれた。本気で観ていただいたことがわかった。私も本気で作っていたので、なんだか嬉しかった。

そのクリエイティブなものへの愛憎、そして家族への愛憎を、一人の女性、一人のアーティストの生き様という視点で描かれた本作は、複雑かつ多様な要素を持ちながら、巧みな構成で軸がぶれず、最後まで観るものを圧倒する唯一無二の傑作だった。山岡さんの次回作が今から楽しみだ。

映画監督 佐々木誠

好きだな…よくワカツテナイ自分自身を巡ってまんま、放り投げるように綴った映画。

日々を見つめ続けた創り手の眼差しが鏡となり、観ている一人ひとりをも写し出す。生かるとは「Maestro(大渦巻き)」…悪くない。

映画監督 伊勢真一

20年の歳月を経て、山岡監督は再び芸術の世界に戻ってきた。

「Maestro」は個人の記録映画でありながら、痛みを超えて生きるこの意味を、私たち一人一人に強く問いかけてくる。混乱を極めた現代、人間として存在することの価値に気づかせてくれる作品。応援しています。

美術作家 宮森敬子

どんなに大きな渦に巻き込まれ、どんなに酷い大混乱に陥ろうとも、生きることは美しい。そんな後味を残してくれる、独創的な作品です。人生、マエルストロムだけど、たぶん大丈夫。俺も、ちゃんと、美しく生きたい。

映画監督 土屋豊